

# 「柎」

廣瀬清一 事務局

キンモクセイの甘い香りが終わり、11月に入り似たような甘く良い香りに気付いた。

周りを見ると、今年植えたヒイラギの枝に小さな白い花が団子状に密生している。

ヒイラギの花の香りは、キンモクセイの優雅な甘い香りと比べて、どこか清楚で心の落ち着く優しさがある。初めはラクトンの甘さがきいたフレッシュフローラルかと思ったが、時間をずらしてよく嗅いでみると、少し複雑な香りをしていた。

「ヒイラギの香調は、cis-3-Hexenol などのフレッシュなグリーン調の香り、Linalool や 2-Phenylethyl alcohol などの爽やかなフローラル調の香り、Eugenol などのスパイシー調の香り、Indole や Jasmine lactone などのジャスミン調の香りが大いに寄与している。また、Phenylacetaldehyde のフローラルグリーン調の香りやラクトン類の甘さが、ふくよかな全体の香気の特徴づけている」とある<sup>3)</sup>。

花は1週間足らずで姿を消した。

日本にあるキンモクセイのほとんどは、花がたくさん付く雄株である。

ヒイラギは、キンモクセイと同じモクセイ科で、雌雄異株の植物である。

11~12月に、雄花と両性花(雌花)とが別株に咲く。雄株の花にも花柱(雌しべ)はあるが、成熟することなく、雄しべが花粉を出した後は花と共に萎れてしまう。一方、雌株の花は、2本の雄しべと1本の花柱がある。果実は楕円形で7月頃に黒紫色に熟す。

12月になると、街のあちこちでクリスマスの飾り付けを見かけるようになる。

リースに用いられる棘のある葉に赤い実を付けたヒイラギは、セイヨウヒイラギ(*Ilex aquifolium* LINNAEUS)で、名前に「ヒイラギ」とあるがモチノキ科の別種である。



ヒイラギ (雄花)

葉の付き方は、ヒイラギは枝に2枚の葉が対になって付く対生なのに対して、セイヨウヒイラギは葉が交互に枝に付く互生と異なる。

ヒイラギは、本州の福島以西、四国、九州、沖縄などの山地に広く自生している。高さ3~8mほどになる常緑樹である。

ヒイラギは、古くは、比比羅木(古事記)、比比良木(延喜式)、杠谷樹(続日本紀)、榕、侏などと表記され、「柎」が使われているのは土佐日記の一例に過ぎない。

ヒイラギの語源は、棘が刺さったときの、ひりひり、ずきずきとした痛みを疼く(ひひらく、ひいらく)といい、「疼く木」「疼木」が簡略化されて「柎」となったとする説が優勢である。

他に、「冬」に芳香のある花を咲かせるので「冬」と「木」を合体させて作られたとする説がある。

「冬」字には「蓄えを包み、取り囲み、守る」という基本義があり、棘のある葉で邪気の侵入を防ぐ目的で生垣や庭木に使われた「木」ということから「柗」につながったとする説などがある<sup>4)</sup>。

江戸時代には、ヒイラギを「柗」とする表記が定着している。



伊勢の注連縄（しめなわ）<sup>8)</sup>を改変

興味深いことに、柗の若い木の葉は、2~5 対の鋭い棘のある鋸歯(きょし)があるが、年を経るにつれて、だんだんと鋸歯は目立たなくなり丸葉となる。成木になると棘が不要になるようだ。

ヒイラギの学名は *Osmanthus heterophyllus* P. S. GREEN である。

キンモクセイ、ギンモクセイを含むモクセイ属の属名の *Osmanthus* の部分は、「香りのある花」を意味している。そして、種名の *heterophyllus* の部分は「異葉性(棘のある葉と棘のない葉という違った形態の葉がある)」を意味している。

柗は、葉の縁に鋭い棘のあることから「鬼の目突」とも呼ばれる。特に、節分には、柗の小枝に焼いた鰯の頭を挿した「柗鰯」を魔除けとして門口に立てる風習がいまも残っている。更に、葉を燃やしたときの臭いや音も鬼を追い払うとされる。

東京近郊では柗、鰯とさらに大豆の豆ガラを合わせて飾る。

「柗挿す」、「柗の花」は共に冬の季語である。

柗は、節分以外の季節でも魔よけとして使われている。

例えば、伊勢を中心とした三重県の中南部で、正月用に売っている注連縄(しめなわ)は、天と地の恵みを受けた青々して太い藁に裏白、馬酔木、橙、譲葉と共に柗の小枝が挿してある。

「お正月には、玄関、門口などに注連縄を飾り、歳神様をお迎えます。松の内を過ぎると外されることが、一般的ですが、こちら伊勢では、一年を通して、注連縄をお飾りします」<sup>7,8)</sup>とある。

都会では、松飾の姿も少なくなって寂しい正月になっている。

「柗を幸多かれと飾りけり」

夏目漱石

(英国に留学中の夏目漱石が、日本にいる病氣療養中の友人正岡子規に宛てた絵葉書に書いた句である。ただし、こちらはセイヨウヒイラギのようです。)

#### 参考文献

- 1) 野崎茂太郎 民俗誌 花の匂う 2003 近代文芸社
- 2) 辰濃和男 天声人語 自然編 1988 朝日新聞社
- 3) 香りの本 「花の香り特集」 2006 日本香料協会
- 4) 寺井泰明 植物の和名・漢名と伝統文化 2016 日本評論社
- 5) 重井薬用植物園 HP 園内花アルバム  
<http://www.shigei.or.jp/herbgarden/>
- 6) 平井信二先生の樹木、木材研究 HP  
[https://wood.co.jp/8-jumoku/hirai/hirai69.](https://wood.co.jp/8-jumoku/hirai/hirai69)
- 7) 伊勢宮 HP <https://www.isemiya.com/>
- 8) 伊勢志摩国立公園 横山ビジターセンターHP  
<http://chubu.env.go.jp/nature/yokoyama/index>